

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520456

研究課題名(和文)ゴジャール・ワヒー語辞書の編纂とデータベース構築

研究課題名(英文)Research on Gojal Wakhi - Compilation of its dictionary and database

研究代表者

吉枝 聡子 (YOSHIE, SATOKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：20313273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：(1)地域特有の民俗関連語彙を含む13,000超の語彙について、収集・逐語チェックを終了し、画像資料確認、用例・例文採録(動詞・機能語等)を行った。藩主制関連用語等、意味が失われつつある語彙については再確認の必要性を残した。(2)使役構文、能格構文などのトピックを中心に文法分析を行い、使役表現については、形態的特徴と使役化のプロセスを整理し、用法上の混乱との関連性について、論文として報告した。

研究成果の概要(英文)：(1)Over 13,000 words were so far gathered; ethnographical data were especially well covered. All the items, some of which were attached with image data, were re-checked by three informants. However, some items whose meaning was already or nearly lost need still further confirmation. The sample sentences were also collected for each verb and function word.(2)The Gojal Wakhi grammatical system, the causative and the ergative construction among others, were closely examined and analyzed. The paper concerning the causative construction and its use was published: the mechanism of causation of Gojal Wakhi and the complexity or confusion in its use, which was caused by the abundance of the causative participants, were clarified.

研究分野：言語学

キーワード：イラン諸語 東イラン語 パミール諸語 記述言語学 少数言語 フンザ ゴジャール ペルシア語

1. 研究開始当初の背景

ワヒー語は、イラン語派パミール諸語に属する言語で、アフガニスタン、タジキスタン、中国新疆ウイグル自治区、パキスタン・ゴジャール地域（ギルギット - パルティスタン州・上部フンザ地方）にまたがる、パミール山岳地帯に分布している。パミール諸語の中で最大の話者を有し、分布域によってアフガニスタン・ワヒー語、タジク・ワヒー語、パキスタン側のゴジャール・ワヒー語の3変種が存在する。いずれも無文字言語である。

このうちタジク・ワヒー語に関しては、Grünberg&Kaminsky(1988)等により、十分とは言えないながらも報告がなされてきた。一方で、パキスタン側のゴジャール・ワヒー語とその文化は、系統不明の孤立言語としてつとに著名な隣接言語ブルシャスキー語に対する調査ブームの影で、しかるべき調査研究の対象となつてこなかった。同言語については、D.L.R.Lorimer (私家版 1958 年出版、調査は 1935 年)以降、Reinhold(2006)、Felmy(1996)等によるテキスト訳や民俗学関連小冊子が出版されたのみである。ゴジャール・ワヒー語に関する研究の遅れは、イラン諸語概説書中におけるワヒー語に関する記述 例へば Schmitt(1989)ではタジク・ワヒー語のデータのみ、Windfuhr(2009)では異変種のデータが混在、混乱した記述 などを見れば明らかである。

パキスタン北部のゴジャール地方は、1974年のパキスタン併合時まで藩王による事実上の自治が認められていた。高度 7000m を越す峻嶒な山岳に囲まれ、地理的に孤立した同地方は 1978 年のカラコルム・ハイウェイ開通までは名だたる辺境であった。ここには、現地特有の伝統的生業・社会形態、言語面では古形を残す文法形態・語彙が今なお保たれている。

研究代表者は、H16-H18 年度に科研費（若手研究 B「ゴジャール・ワヒー語の調査研究—基礎語彙および民俗・民族誌資料の収集と分析」No.16720084）を受け、調査研究を行った。この期間中、新たな換金作物ジャガイモの導入による、農事暦・祭礼の廃止や生業形態の劇的な変化、イスマール派系財団からの農村開発援助による近代的教育の導入と伝統的習俗の消失など、あらゆる面で、その伝統的形態が急速に失われていく状

況を目の当たりにした。この状況に対する危機感から、H19-22 年度には、引き続き科研費（基盤研究 B「ゴジャール・ワヒー語圏の調査研究 - 文法分析・比較基礎語彙と民俗誌資料の採集・分析」No.19401418、自然災害により 1 年繰越、H23 年度終了）を受け、刻々と失われつつある伝統的語彙を記録するべく、調査研究を継続した。現地では良好な人的ネットワークに恵まれ、H23 年度までに微地名を含む 10,000 語超の語彙を収集した。ここには、現地のエコロジーや伝統的な社会・生業形態、習俗、祭祀、宗教・通過儀礼などの幅広い分野に加え、現地の家族・社会構造を反映した、緊密な人間関係や感情の機微を表す語なども含まれている。

これらの成果は基礎語彙集として出版する予定であったが、質・量共に当初の予定を大幅に上回る語彙データが得られたため、最終的な確認作業を完了するに至らなかった。この段階で簡略な語彙集を出版することも可能ではあったが、それよりも、さらなる精査とデータの拡充を加え、より質の高い本格的な辞書を編纂する方が、学界への貢献や現地還元のためにも至適であろうと考えた。

2. 研究目的

以上の経緯をふまえ、本研究では、ゴジャール・ワヒー語に関する総合的・包括的な辞書を作成して関連学界に提供し、同言語の位置づけを明らかにすると共に、現地にその成果を還元することを目的とした。ゴジャール・ワヒー語辞書は、単なる「語彙集」ではなく、ゴジャール・ワヒー語圏に関する総合事典的な性格をもち、さらに、当該言語に関する文法情報や用例を詳細かつ豊富に提供することで、無文字言語であるゴジャール・ワヒー語の学習辞典としても、現地で活用できるレベルのものを目指した。また、上記辞書の出版後には、資料画像・映像も含めた語彙データのアップロードを行うことを目的とした。

3. 研究の方法

具体的には、以下の 3 点である。(2)については現地調査によるインフォーマント調査を中心に作業を行う：

(1)言語調査票の準備—ゴジャール・ワヒー語とワヒー語他変種（タジク・ワヒー語、アフ

ガニスタン・ワヒー語)との比較研究,および,ゴジャール・ワヒー語の下位方言比較のための調査票を準備する。

(2)ワヒー語辞書編纂作業

辞書収録語彙の逐語チェックおよび用例採集

既に収集済みの,ワヒー語辞書収録予定の単語について,最終確認の逐語チェックおよび必要な語彙について用例・例文収集を行う。並行して,新たな語彙の収集作業も並行して行う。

資料写真・画像照合

現地生態系の関連語彙等で辞書に画像を掲載する必要がある語について,撮影済みの写真等を照合する。必要な場合は音声を含めて記録する。

民話・民俗誌テキストの収集と分析

のうち,民話・民俗誌・史譚,また,近年の社会・経済的变化により既に失われつつある儀礼や祭祀に関連する用語,及び藩主国時代の社会・労役制度等の語彙については,村の長老や語り部などの協力を得て聞き取り調査を行い,関連テキストを収集する。

(3)文法分析作業

上記(2)と並行して,収集した用例や言語テキストをもとに,ワヒー語の文法分析を実施する。本研究期間では特に,その使用に混乱が認められる使役表現,タジキスタン・アフガニスタン側のワヒー語では既に失われている能格構文と格表示システム使用の現状,いわゆる moving particles,関係詞の乱れなど,さらなる考察を要する文法事象を主要なトピックとする。この際,可能な限り,タジク・ワヒー語やゴジャール・ワヒー語下位変種との比較を考慮に入れる。

(4)ワヒー語総合データベースの構築

ワヒー語辞書の出版後の公開を目指して,辞書データベースの整備を行う。

4. 研究成果

(1)辞書編纂作業

本研究期間終了時まで計約 13,000 語の単語を収集し,出版準備のための逐語確認作業をほぼ終了した。これらの語彙には,基礎語彙に加え,現地のエコロジー,民俗,伝統的村落形態,農業牧畜,イスマイリー派,産育語彙等に関連する,地域特有語彙などが含まれる。ただし,かつての藩主制に関連する

用語や,馬飼育や馬具関連語彙のように,近年の社会・生活形態の変化によりすでに失われた・失われつつある事象を表す語彙については,地域の長老の協力を得て確認を行ったものの,チェックしきれなかったものも残っており,なお継続調査が必要となった。また,現地生態系の関連語彙や,地域性が高くその消滅が危惧される語彙について行った,資料写真・画像との照合作業はなお継続中である。機能語や動詞については,辞典に掲載するべく逐語レベルで用例および例文を採集した。なお,当該言語の語彙に見られる諸相およびその特徴について,研究会等で報告を行った。

(2)文法分析

本研究期間に行った文法分析のうち,特に,大きな成果が得られた使役表現について,以下に概要をまとめておく:

ゴジャール・ワヒー語の使役表現には,使役派生接辞の接続による形態的使役文と,動詞の不定詞と補助動詞による迂言的使役文の二種類がある。形態的使役では,自動詞または他動詞の現在語幹に使役派生接尾辞 *uv* を付加して使役動詞を形成する。一方,迂言的使役は,自動詞・他動詞の不定詞+補助動詞 *rmeyn*「~させる」によって表される。迂言的使役文は形態的使役文に比べて生産性が高く,ほぼ全ての動詞から作ることができる。

近年の言語類型論では,使役(causative)を動詞のもつ項構造の変化に関わる文法的手続きの一環としてとらえ,使役者(causer)項の増加とそれに付随する本来の動作主語→対応する形式への降格,および関連する結合価階層の考察,という枠組みで扱われる。ゴジャール・ワヒー語の使役文では,元となる非使役文の直接目的語が使役文でも保持され,被使役者は使役文のタイプによって,直接目的語または属格,または例外的に与格に立つ。これは,Dixon(2000)の分類では *v* 非使役文で他動詞の目的語が使役文で保持され,被使役者は結合価の階層に従って適用される *v* のタイプに属する。

ただし,この言語では,使役文で保持されるはずの直接目的語と使役者は,同言語が分裂能格(現在時制で主格・対格構文,過去時制では能格構文)をとるため,実際の使役文では時制によって異なる格として実現され

る。さらに、ゴジャール・ワヒー語の使役文では、使役者(A)、直接目的語(O)、被使役者(causee, X1)、それに使役仲介者(X2)までの要素を、前置詞句等の付加詞や補文を添えずに格変化のみで表す。つまり、一部の動詞に限定した例外的用法を含めると、最大で「AがX2をしてX1にOを~させる」という文を、付加詞を用いずに表すことが可能である。このため、ゴジャール・ワヒー語の使役文では、使い分けの煩雑さや、通常の使役化の手続きから外れた使用上の乱れなどの問題点が認められる。具体的には— 使役文のタイプによって奪格の表す要素が異なる、迂言的使役文において、本来不要な使役派生接辞の挿入が認められ、使役文のタイプによってその有意義性にゆれが見られる—などである。

上記を背景に行った文法分析の結果より判明した、当該言語の使役表現の形態は以下の通りである。

使役表現は、想定される使役参与者の位置に、適当な項要素を当てはめていくことで実現される。ゴジャール・ワヒー語の使役表現では、使役者(A)、被使役者(X1)、目的語(O)、使役の仲介者(X2)までの4要素が使役文に関与するため、使役文では最大で4つの参与者スロットが想定され、実際に使役文を作る際には、各々の参与者位置に、適宜項要素を入れていくことになる。

当てはめられる項要素は、主語>直接目的語>斜格目的語(与格または奪格)の階層を成しており、要素が選択される際は、上の階層(左側)から、まだ使われていないものを採用する。言語類型論では、この階層は主に被使役者が現される項要素との関連から説明されるが、ゴジャール・ワヒー語ではもう少し拡大して、形態的使役文・迂言的使役文両方の使役化プロセスに関わる要素の確定についても、結合階層の関連性を用いて説明することができる。

以下に、使役参与者と項要素の関連性から、ゴジャール・ワヒー語の使役文のタイプの使役文で想定される参与者要素とその位置に適用される項をまとめる。下では、使役者=A、被使役者=X1、目的語=O、使役仲介者=X2で示した参与者要素の右側に、項要素を実際の実現形式を添える形で示す。使役文タイプのa.は使役仲介者なし、b.は使役仲介者が明

示される文である。また、Vcausは使役派生接辞が付加された動詞を表す。

なお、ゴジャール・ワヒー語では主語と直接目的語が実現される格の形式が現在時制と過去時制で異なるため、ここでは現在時制の例で提示する。

自動詞

・形態的使役文

a. Anom X1acc Vcaus

b. Anom X2abl X1acc Vcaus

・迂言的使役文(V=inf, Vcausは使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom X1acc V rmeyn

b. Anom X2abl X1acc V rmeyn

or

b. Anom X2abl X1acc Vcaus rmeyn

Vcausは余剰。参与者スロットと項要素は残っていないため、V/Vcausによって文意は変わらない。Vcausは単に補強となる。

他動詞

・形態的使役文

a. Anom X1abl Oacc V

「AがX1にOをVさせる」

b.* Anom X2 X1abl Oacc Vcaus

「AがX2をしてX1にOをVさせる」

b.は使役文では表せない構造。参与者位置は想定できるが、X2に入るべき項要素が残されていないため、通常の使役文では表せない。X2が必要な場合は付加詞等で表す。

・迂言的使役文(V=inf, Vcausは使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom X1abl Oacc V rmeyn

b. Anom X2 X1abl Oacc Vcaus rmeyn

(Vcaus)

X2要素のみ空いているが、項要素は使い切ったため、実現はされない(付加詞が必要)。しかし使役派生接辞の付加が可能な動詞では、Vに替えてVcausを置くことにより、X2の存在を含意することが可能。このため、使役派生接辞の有無によって文意に差異が生じる。

'受益動詞

・形態的使役文

a. Anom X1dat Oacc Vcaus

b. Anom X2abl X1dat Oacc Vcaus

この文は通常他動詞派生使役文では表すことができない。受益動詞ではX1部分にdatが入るため、X2部分に残ったablを入れ

ることが可能。

・迂言的使役文 (V=inf, Vcaus は使役動詞をもつ動詞のみ)

a. Anom X1acc Oacc V rmeyn

*ここでX1がACCで実現される理由は今後の検討課題。

b. Anom X2ablX1dat Oacc V rmeyn or

b. Anom X2ablX1dat Oacc Vcaus rmeyn

自動詞の場合と同様にVcausは余剰。参与者スロットと項要素は残っていないため、V/Vcausによって文意は変わらない。Vcausは単に補強となる。

例外：3項動詞

・形態的使役文

cf. S O'dat Oacc V

(参考のために非使役文をあげておく)

a. Anom X1abl O'dat Oacc V rmeyn

被使役文の間接目的語が使役文でも保持されるので、受益動詞の使役化プロセスとは異なる。

・迂言的使役文 (V=inf)

b. Anom X1abl O'dat Oacc V rmeyn

上掲の使役化プロセスのように、ゴジャー・ワヒー語では、非使役文における直接目的語は、使役文では直接目的語のまま保持され、被使役者(X1)の実現形式は項要素の階層に従って決定される。このため、元となる非使役文が自動詞か、あるいは直接目的語(O)をもつ他動詞であるかによって、被使役者(X1)が表される段階にずれが生じることになる。ゴジャー・ワヒー語では、使役仲介者(X2)までが使役参与者要素に含まれるため、この「ずれ」は、被使役者に続いて決定される使役仲介者の形式にも及ぶ。結果として、使役文のタイプによって、まず、他動詞文と自動詞文では、被使役者(X1)、使役仲介者(X1)の表示形式が各々異なることになる。

これに加えて、他動詞文のうち受益動詞では、被使役者(X1)が、斜格目的語で一般的に用いられる属格でなく、受益性に関連の深い与格-erで表される。斜格目的語内では与格と属格に階層性はなく、受益動詞では例外的に異なる格であれば共起を認めるため、実現される結合価の選択肢が一つ多くなる。つまり、同じ他動詞文内でも、一般の他動詞と受益動詞では、被使役者(X1)、使役仲介者(X2)の表示形式が異なることになる。

次に、迂言的使役構文における使役派生接辞-uvの余剰な挿入と有意義性に見られる差異は、奪格-enによって使役仲介者が添加される場合に見られる現象で、奪格に-uvがもつ狭義の使役の意味「~させる」に引っ張られる形で挿入されたものと考えられる。この接辞が使役文タイプによって意味の弁別性に関与する場合としない場合があるのは、挿入される使役文の構造が異なるためである。つまり、参与者スロットと項要素の関連から、接辞によってその使役文にまだ変化を加えられる余地が残っている場合は有意義に働き、そうでなければ、接辞を付加しても単なる余剰として補強の役割をもつに過ぎない。

上の分析でも説明できない問題が残った。一部の他動詞派生の使役動詞が、使役の意味と本来の派生元他動詞の意味の両方で用いられる点である。つまり、構造上は使役構文をとるにもかかわらず、使役「XにOを~させる」の意味に加えて、派生元他動詞と同一の意味「AがOを~する」を持つものが、相当数認められる。このタイプの動詞では、構造上は-uvによる使役化のプロセスを経ているが、-uvの使役派生機能が反映されていないことになる。これは非常に興味深い現象であるが、構造上や使役化プロセスでなく意味的観点からの分析を必要とすることが予想されるため、今後あらためて考察するべき課題と考えている。

(3)辞書データの公開・その他

辞書データおよび音声データについては、本研究期間中に辞書データベースの作成・公開を目指していたが、辞書編纂に係る逐語チェックおよび画像照合等の作業に予想より時間がかかり、また著作権等の関係からデータ公開は辞書出版後を予定していたため、この点については達成できなかった。来年度以降に予定している辞書出版を行った後に作業を継続し、しかるべき時期の公開につとめたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

吉枝聡子「ゴジャー・ワヒー語の使役表

現」『東京外国語大学論集』No.88, 東京外国語大学, pp.303-28, 2014/7, 査読有.

吉枝聡子「フィールドワークと言葉の語彙—パミールの言語・ワヒー語」『言葉とその周辺をきわめる』(東京外国語大学語学研究所・活動報告書)東京外国語大学語学研究所, pp.91-112, 2014/3.

吉枝聡子「ペルシア語の他動性」『語学研究所論集』No.19, 2014/3, 東京外国語大学語学研究所, pp.277-88. 査読有.

吉枝聡子「ペルシア語の所有・存在表現」『語学研究所論集』No.18, 2013/3, 東京外国語大学語学研究所, pp.362-78. 査読有.

吉枝聡子「ペルシア語の受動表現」『語学研究所論集』No.17, 2009/3, 東京外国語大学語学研究所, pp.228-30. 査読有.

〔図書〕(計2件)

清水直実・吉枝聡子・上岡弘二『ギーラーン州の聖所 I』(Studia Culturae Islamicae No.100, MEIS Series No.17), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 297pp.

吉枝聡子「王座を担う群像を突よ！-ダレイオス王の浮彫」『画像史料論』吉田ゆり子他編, 東京外国語大学出版会, 2014/4, pp.94-115.

〔その他〕

・研究会報告他

吉枝聡子「ゴジャール・ワヒー語の能格表現—犬がキツネを噛む？キツネが犬を噛む？」(東京外国語大学国際日本研究センター 第11回研究会) 2013/12/21 於東京外国語大学

吉枝聡子「フィールドワークと言葉の語彙—パミールの言語・ワヒー語」(東京外国語大学オープンアカデミー『言葉とその周辺をきわめる』2012/11/6 於東京外国語大学本郷キャンパス

ホームページ等

http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_

corpus/wakhi/

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉枝 聡子 (YOSHIE Satoko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号: 20313273